

ロクロ使用酸化焰焼成甕について

——群馬県内の実体把握を目的として——

桜 岡 正 信

1 はじめに

群馬県における煮沸具は、古墳時代以来9世紀後半までの間、土師器甕が主体を占めていた。⁽¹⁾特に7世紀前半に出現すると考えられる「武藏型」土師器甕は、埼玉県・群馬県を中心として広域に分布する地域差の少ない甕であり、その生産がかなり統制のとれた中で行われたことを意味している。この「武藏型」土師器甕が、9世紀末から10世紀初頭を変換点として出土量が減少し、代わって須恵器系の煮沸具とされる羽釜が出現増加する。さらにこの羽釜の出現と前後して、やはり煮沸具と考えられるロクロで整形し酸化焰焼成された甕（以下ロクロ甕と略称する）の出土量が増加する傾向が窺える。このロクロ甕は、これまでの調査報告書では単純に須恵器や土師器とされたり、羽釜より後出の土釜として捉えられたりすることが多かった。しかしその系譜を群馬県における9世紀段階以前の須恵器に求めることはできず、まして製作技法は土師器の系譜とも考えにくい土器である。つまりそれまでの須恵器・土師器という概念では捉えにくい、新たな土器生産主体への転換または変質によって生み出されたものと考えられる。こうしたロクロ整形した土器群の酸化焰焼成現象については、供膳具やその他についても認められることであり、既に「土師質土器」や「ロクロ土師器」という概念が提唱されている。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

本稿では、生産体制についての既製概念をとりあえず保留し、現象として捉えられる「ロクロ整形酸化焰焼成」土器群の実態把握の一環として、上記のロクロ甕を取り上げ、その属性分析と時期の検討から系譜を明らかにし、出現の背景等について検証したい。また、ここで扱うロクロ甕については、大小にかかわらず「ロクロ回転力を利用した器面調整を施し、酸化焰焼成された甕型土器」と定義しておきたい。

検証の方法は、群馬県内出土のロクロ甕について分類を行い、各分類毎の共伴事例から出現の時期や継続期間を明らかにする。そしてロクロ甕の胎土・焼成等の属性について分析し、他県のロクロ甕との比較から系譜と製作者について考え、土師器甕からロクロ甕への転換の意義を探る。

ここで本論に入る前に、ロクロ甕に関する論考に若干触れておきたい。まず、保坂康夫氏は「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」と題し、煮沸具のロクロ整形現象を支配層の動きと密接に結びつけて考察し、ロクロ甕の生成を須恵器工の移入による現象とする見解を示している。⁽⁶⁾

次に、坂井秀弥氏は「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」と題するシンポジウム報告で、ロクロ土師器煮炊具の製作技法が須恵器製作技法と共に、しかも須恵器窯から出土する例があること、及び在地の須恵器生産の開始とともに出現することをあげ、その生産には須恵器工

人が関与している可能性を指摘している。また、9世紀後半以降は須恵器生産が衰退し、代わりにロクロ土師器が急速に普及することを捉えて、ロクロ土師器専用の生産施設の存在について述べている。

群馬県内での例としては、直接にロクロ甕を対象としたものではないが、三浦京子・黒澤はるみ両氏による「平安時代の煮沸土器について」⁽⁸⁾と題する論考がある。両氏は群馬県で「土釜」と呼ばれる器種について検討する中で、ロクロ甕の胎土と整形技法が羽釜と共に通する点が多いことに注目し、同一の生産主体によって生産されていた可能性を指摘している。また、11世紀代に主体的にみられる土釜の中にロクロ整形痕を残すものがあり、しかも形態的にもロクロ甕や羽釜に似た一群があることから、土釜がロクロ甕から変化したのではないかと結論づけている。

以上のように異なる3地域の論考について触れたが、ロクロ甕が8世紀代に出現しその後伝統的に製作される山梨県・新潟県などと、10世紀代に主体化する群馬県などでは、出現の背景に大きな違いがありそうである。

3 分類(図1)

図1の分類は、ロクロ甕の形態的バラエティを捉えることを第一義的にし、全体のプロポーションと特に口縁部(口唇部)形態に着目して行った。また、ロクロ甕という概念の中に入るものであっても、出土例がわずかで特異な形態のものについては分類から除外している。⁽⁹⁾

A. 脇部中位に脇部最大径を有し、口縁部は比較的長く「く」

字状に屈曲し、上端でわずかに内湾するいわゆる「受け口」状を呈するものである。器面整形は上半にロクロ整形痕を明瞭に残し、下半は斜方向の箇削りを施す。

B. 脇部上位に最大径を有し、口縁部は短く外反し口唇部に丸味がある。器面整形は、Aタイプと同様であるが、下半の箇削りを施さないものがある。

C. 脇部上位に最大径を有し、口縁部は短く「く」字状に外反し、口唇部断面が三角形状を呈する。器面整形はBタイプと同様である。

D. 脇部の張りが強く上位に最大径を有し、他のタイプと比較して短脇で、口縁部は短く「C」字状に外反する。器面整形はBタイプと同様である。

以上のようにB～Dタイプには形態上に共通する要素が多く、Aタイプとの違いが比較的顕著である。しかし器面整形に関しては全タイプに共通している。

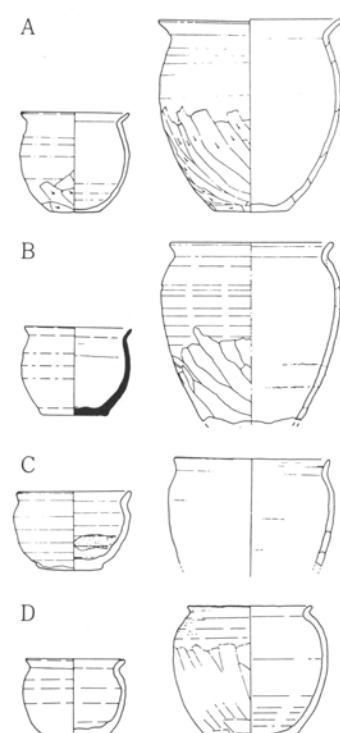


図1 分類

4 出現と継続の時期について

図2～図5は各タイプ別の共伴事例を示したものである。群馬県は地形上利根川の東西の地域と北部の3つの地域に別れるため、各地域毎の消長が捉えられることが望ましいが、出土例が少ないため全体の傾向を捉えるに止まった。また、所属時期については各報告者の報告を尊重したが、筆者の見解と合わないものについては修正したものもある。

[Aタイプ] (図2)

Aタイプを出土した例は、現在までのところ北部の地域に限って検出されており、例としては
 蔽田遺跡6区1号住居が最も特徴的であるが、後述するのでここでは蔽田遺跡5区3号住居、蔽
 田東遺跡6号住居例を提示した。

蔽田遺跡5区3号住居 17のロクロ甕は、北西隅の掘り方から出土したもので、下半を欠損するため箆削りの有無については不明であるが、上半内外面のロクロ整形痕は明瞭である。共伴する18・19の「武藏型」土師器甕は「コ」字状を呈する直前の口縁部形態であり、須恵器壺の形態からも9世紀前半段階に位置付けられるものと考えられる。

蔽田東遺跡6号住居 40のロクロ甕は、図上復元されたものであるが、胴部上半はロクロ整形、下半は斜位の箆削りを施している。所属時期は、土師器小型甕や須恵器壺の形態から9世紀中頃から後半に位置付けられると思われる。

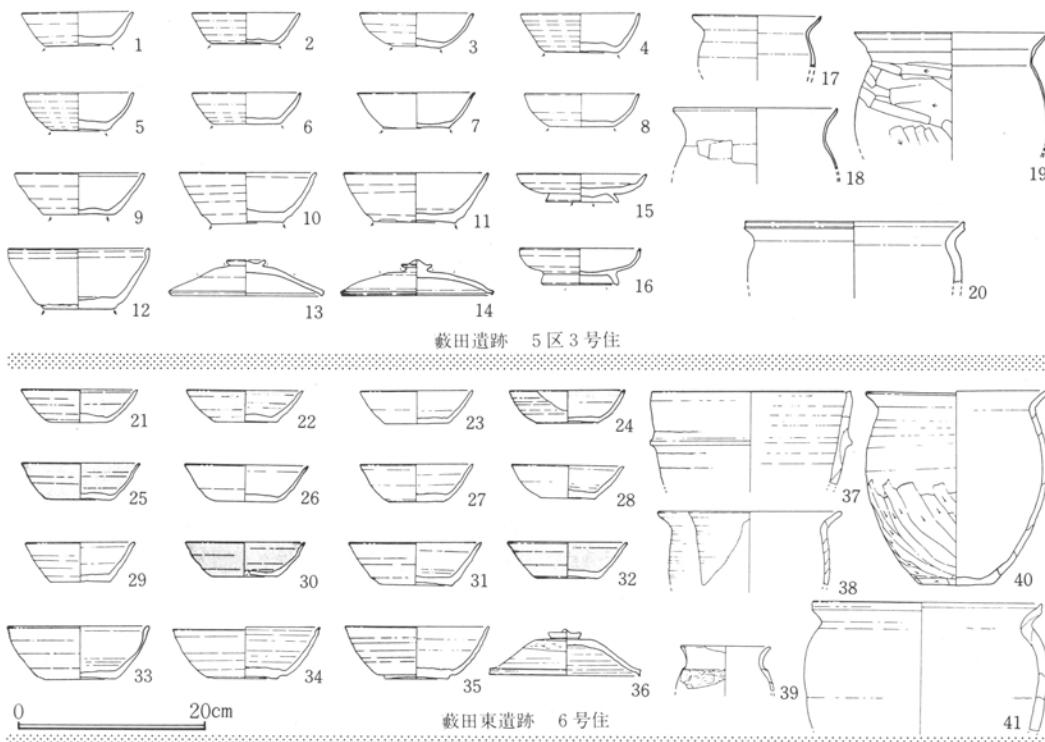


図2 Aタイプ出土例

[B タイプ] (図3)

B タイプの出土例は分類中最も多いが、北部の適當な例をみつけることができず、利根川東部の上植木光仙房遺跡25号住居、三ツ木遺跡86・223号住居と、利根川西部の鳥羽遺跡G区4・68号住居を提示した。

上植木光仙房遺跡25号住居 7のロクロ甕は、須恵器土釜として報告されている例で、カマドの周辺から出土したものである。胴部下半を欠損するため下半の整形が不明瞭であるが、観察表では縦方向の粗い箇削りとされている。共伴する6・8・9は「武藏型」土師器甕であるが、8の口縁部形態は「コ」字状のくずれであり、9世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

鳥羽遺跡G区68号住居 15のロクロ甕は、土師器甕として報告されており、胴部上半はロクロ

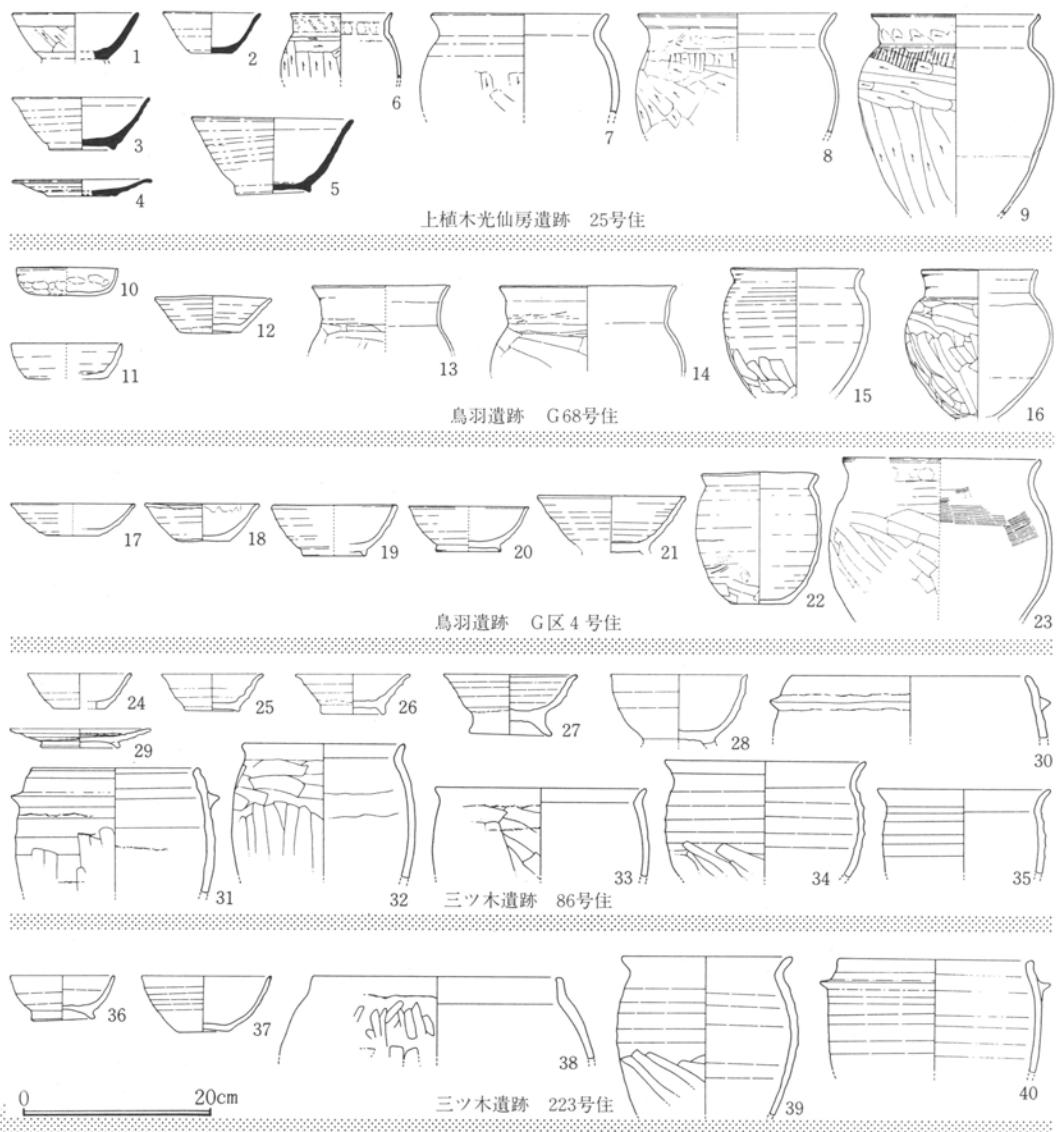


図3 B タイプ出土例

整形痕を残し、下半は斜位の箒削りである。観察表によれば成形が羽釜に近似するようである。共伴する遺物から9世紀中頃のものと考えられる。

鳥羽遺跡G区4号住居 22のロクロ甕は、15同様土師器甕として報告されている。カマド近くの床面からの出土で完形である。胴部は全体にロクロ整形痕を残し、下半の一部に箒削りが認められる。底部は不定方向の箒削りで、胴部に炭化物の付着が見られるようである。共伴遺物の23は「武藏型」土師器甕のほぼ最終形態で、羽釜との共伴も考えられる時期のものと思われ、10世紀前半の時期が想定できる。

三ツ木遺跡86号住居 34・35がロクロ甕で両方共床面の出土であり、(土師器)として扱われており、34の胴部下半には斜位の箒削りがみとめられるが35では不明である。32・33の胴部に箒削りを施した甕が土師器甕であるとすれば、ロクロ甕・土師器甕・羽釜の共伴事例とすることができ、10世紀代と報告されている。

三ツ木遺跡223号住居 39がロクロ甕で、覆土中の出土である。胴部上半はロクロ整形、下半は斜位の箒削りを施している。覆土中の出土ではあるが、他の住居との重複は無く38の土釜、40の羽釜と共に共伴例とみることができる。時期は11世紀代と報告されている。

[Cタイプ] (図4)

Cタイプの出土例としては、北部の例として藪田東遺跡5号住居、利根川東部の例として上植木光仙房遺跡30号住居、利根川西部の例として鳥羽遺跡K区4号住居と上野国分僧寺・尼寺中間⁽¹⁵⁾地域（以下国分寺中間地域遺跡と略称する）H区61号住居を提示した。

上植木光仙房遺跡30号住居 10のロクロ甕はカマド周辺から出土したもので、須恵器小型甕として報告されている。胴部最大径の部分以下には箒削りが施されているものと考えられる。共伴する壺・塊類は東部に特徴的な体部に箒削りを施した土師器系のものである。また、11・12は「武藏型」土師器甕であり、形態的特徴から9世紀後半から末と考えられる。

藪田東遺跡5号住居 24・25のロクロ甕は共に床面から出土したもので、胴部下半の箒削りは残存部分においては観察できない。共伴する遺物は須恵器の壺・塊と羽釜が主体で、10世紀代と考えられる。

鳥羽遺跡K区4号住居 36のロクロ甕は、カマド近くの床面から出土したもので、胴部上半はロクロ整形、下半は縦位の箒削りを施している。共伴する煮沸具は羽釜だけであり、壺・塊の形態からも10世紀代のものと考えられる。

国分寺中間地域遺跡H区61号住居 40のロクロ甕は須恵系の小型甕として報告したもので、ほぼ完形の状態でカマド内から出土した。同じく44の土釜もカマド内の出土であり、共伴関係は確実な資料である。器面整形は全体にロクロ整形痕を残し、下半に箒削りは認められない。また、底部は回転糸切り後、周辺に雑な撫でを施している。時期は、土釜の存在や39のいわゆる「土師質土器」壺の形態的特徴から11世紀前半代と考えられる。

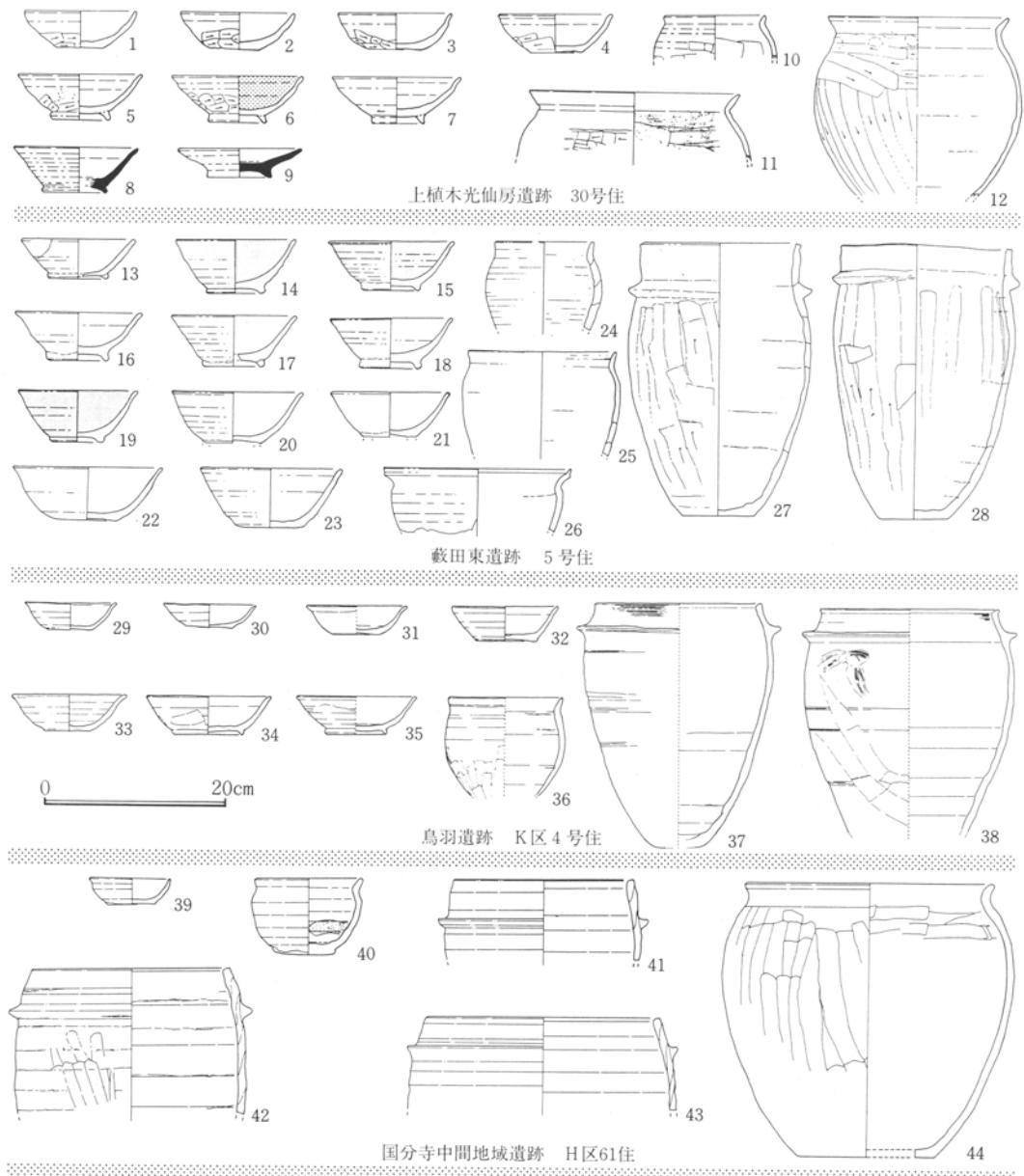


図4 Cタイプ出土例

【Dタイプ】(図5)

Dタイプの出土例は、あまりみつけることができなかったため、鳥羽遺跡H区32号住居と中尾遺跡E-19号住居の例を提示した。

鳥羽遺跡H区32号住居 9のロクロ甕は、床面と貯蔵穴内から出土したもので、口縁部から底部まで約1/2が残存している。整形は胴部上半にロクロ整形痕を残し、胴部最大径の部分から下位は笠削りが施されている。共伴遺物には、8の「武藏型」土師器甕の口縁部形態のくずれたものがあり、また、須恵器坏・境の形態から10世紀前半代の時期が考えられる。

中尾遺跡E-19号住居 14のロクロ甕は、ほぼ完形で床面からわずかに浮いた状態で出土したものである。胴部はロクロ整形痕を明瞭に残し、下半に箆削りはみられない。共伴

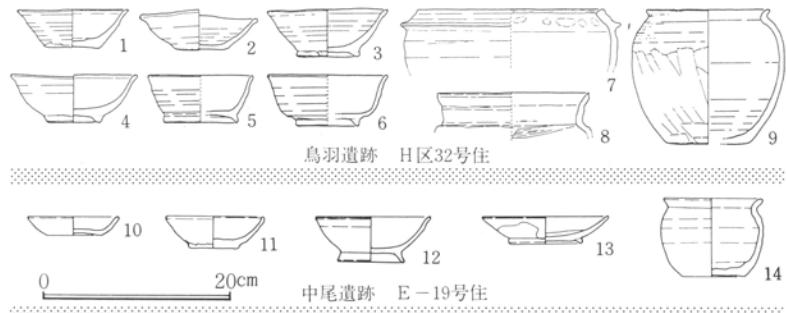


図5 Dタイプ出土例

する遺物はごく少ないが、いわゆる「土師質土器」の坏・塊と灰釉陶器皿であり、特に9の小型の坏は群馬県内において年代の定点の一つとして扱われている、⁽¹⁷⁾鳥羽遺跡S K332出土の小型の坏に近い形態のものであり、11世紀後半以降の時期が考えられる。

以上各タイプ別に県内の出土例にあたって、出現と継続について検討したことをまとめると、AタイプはB～Dタイプに先行して、9世紀前半代から北部地域に限って出土がみられることが特徴であり、また、10世紀以降の時期まで継続していない。これに対してB・Cタイプは9世紀代にわずかに出土例がみられるが、大半は10世紀以降に出現し、しかも県内全域に拡散し出土量が増加する。Dタイプは出土例が少なく傾向を捉えにくいが、B・Cタイプよりもさらに後出的な要素が強い。つまり出現時期だけの比較ではA→B・C→Dという順位が想定され、10世紀後半代以降はB～Dタイプが併存するというのが実態である。しかし分類で指摘したようにAタイプとB・Cタイプとの形態上の違いは明確で、間を埋めるような資料は検出されていないことは、群馬県においてはAタイプとB・Cタイプは不連続であったことを示している。また、共伴する煮沸具については、Aタイプが「武藏型」土師器甕との共伴例だけで、B～Dタイプは「武藏型」土師器甕との共伴は少なく、羽釜・土釜との共伴例が主体的であることが特徴である。

5 ロクロ甕の属性分析

(1) 成整形技法について

ロクロ甕の成形技法は、基本的には粘土紐による巻き上げまたは輪積みによると思われ、大型のものに粘土紐の接合痕が観察されている。底部は残存する例が少なく全体傾向とは言えないが、大型の場合撫でまたは箆削りされているものが多く、小型の場合は回転糸切り無調整のものが大半を占めている。器面の整形は、全体にロクロ整形痕を残すものと、胴部下半に箆削りを施すものの2種類がみられる。傾向としては小型のしかも時期的に下る資料の中に前者のものが多く、大型のものはほぼ例外なく胴部下半に箆削りを施すものである。また、この胴部上半にロクロ整形痕を残し、下半を箆削りするという器面整形の特徴は、9世紀代に中心をもつAタイプと10世紀以降に主体化するB～Dタイプに共通するものであり、技法的連続性がある。

以上のように成整形技法は、研究史で触れた各氏が指摘しているように須恵器製作技術だけで

も製作可能なものであり、羽釜の成整形と基本的に同じものである。

(2) 胎土・焼成について

Aタイプの胎土は、藪田遺跡報告で指摘されているように須恵器と共に胎土が多い。焼成は全体に均一で色調も明るく硬質な印象を受けるものであり、焼成に際して構造窯を使用している可能性が強い。ただこの地域の須恵器は焼締めは弱いものの還元焰焼成されるのが通例であり、併焼されたことは考えられない。

B～Dタイプは、Aタイプのように同時期の還元焰焼成された須恵器とは胎土の共通性はみられず、タイプ別の特徴的な胎土も判別できない。最も顕著にみられるものは砂粒と黒色鉱物粒(角閃石・輝石)を均一に含むもので、9世紀後半には出現している酸化焰焼成された壺・塊などと共通している。焼成は酸化焰焼成であるが、土師器甕と比較して全体に均一な焼き上がりで、しかも明るい色調のものが含まれ、羽釜の焼成・色調に類似している。また、胎土・焼成にいわゆる「土師質土器」や三浦・黒澤両氏が指摘しているように土釜と共に胎土とも認められ、その生産主体者を考える上で示唆的である。

(3) 用途について

大型の土師器甕や羽釜はカマドに架けられた状態の出土例があり、煮沸具として使用されたことは周知の事実である。また、使用の痕跡では大型の土師器甕及び羽釜には炭化物が付着する例が少ないのでに対して、小型の土師器甕に炭化物の付着する例が比較的多い傾向がある。こうした周知の煮沸具の傾向に対して、ロクロ甕はカマド内及びカマド付近から出土する例は比較的多いが、直接に使用状態を示すような検出例はない。しかし小型のロクロ甕には外側面に炭化物の付着する例が顕著で、しかも大型のロクロ甕には炭化物の付着はほとんど認められず、土師器の甕と同様の傾向がみられる。さらにロクロ甕の整形上の特徴である胴部下半の箝削りは、原則的には土師器の甕や羽釜と共に胎土である技法であり、また、底部付近の残存率が低い点でも共通している。以上の共通点は、ロクロ甕が土師器甕や羽釜同様に煮沸具として使用されたことを間接的に証明している。使用の痕跡とした土師器甕とロクロ甕に共通して認められる大小での炭化物付着の違いは、調理方法の違いを端的に表していると考えられ、既に坂井氏によって大型の甕は米を蒸すために使用し、小型の甕は汁ものを煮るために使用したのではないかとの見解が示されて⁽¹⁸⁾いる。

次に、ロクロ甕の煮沸具としての位置付けについてみると、図2～5からもわかるように一住居内の煮沸具がロクロ甕だけで構成される例は皆無で、ほとんどの場合土師器甕や羽釜などと共に伴し、しかもそれらの従的な存在であることがわかる。これは前段階の土師器甕が単独で煮沸具を構成していることと大きな違いであり、ロクロ甕が単独で土師器甕に代わるものでないことを示している。

(4) 法量について（図6）

ロクロ甕は、土師器甕や羽釜と同様に底部を欠損している例が多いため、図6のグラフでは口径をもとにした出現頻度を示した。また、(6)には国分寺中間地域遺跡のF・G・H区の約224軒の住居から出土した「武藏型」土師器甕と羽釜について、同様の視点で位置付け、(5)のA～Dのロクロ甕全体を積層グラフ化して位置付けたものと重ねて示した。

ロクロ甕の各タイプ毎の傾向は、資料が少ないために明確に捉えにくいが、(2)のBタイプと(5)のグラフから、少なくとも10～14cm、17～21cmの2つのエリアに集中する傾向が窺える。したがって既に図1に示したように、ロクロ甕には少なくとも大小の別がある。この大小の別は新潟県などのロクロ甕主体地域での、小型ロクロ甕と大型長胴のロクロ甕のセットに対応するものと考えられる。

次に「武藏型」土師器甕と羽釜の口径別出現頻度との比較をすると、「武藏型」土師器甕は、10～14cmと18～22cmの2カ所に集中がみられ、ロクロ甕の口径出現頻度とほぼオーバーラップしている。しかし、羽釜は18～22cmのエリアだけに集中する傾向があり、小型の土師器甕やロクロ甕に対応する小型の羽釜はみられない。羽釜が10世紀以降土師器甕に取って代わる主体的煮沸具であるとすれば、伝統的調理方法に大きな変化がないかぎり、組成の上から羽釜だけでは土師器甕に代わることはできないことになる。口径の出現頻度からは土師器甕とロクロ甕が共通するエリアに集中する傾向が捉えられる。しかしロクロ甕の出土数は大小でほぼ同程度であり、土師器甕にみられる大型主体の出土が認められないことは、ロクロ甕の大小が土師器甕と同程度の比率で生産されていないことを示している。このことは前述したようにロクロ甕だけで煮沸具を構成するのではなく、大型だけで構成されている羽釜と組み合わせることによって、土師器甕に代わる器種としての位置付けができるものと考えられる。

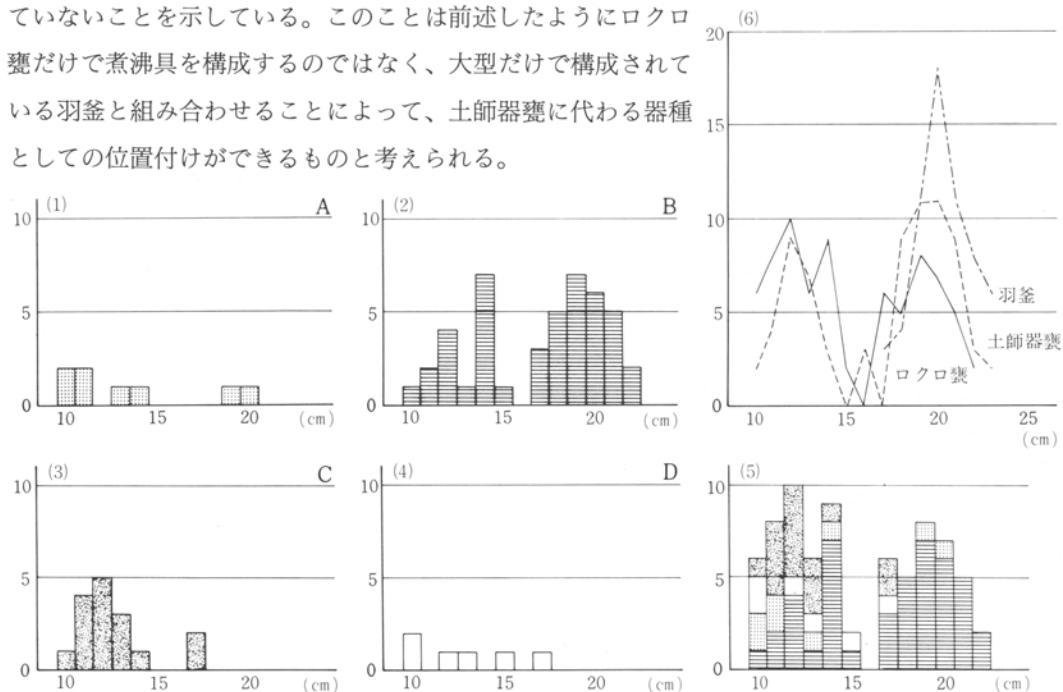


図6 各タイプ口径別出現頻度グラフ

6 系譜について

群馬県でロクロ甕が出現する9世紀段階は、冒頭で触れた斉一性の強い「コ」字状口縁の「武藏型」土師器甕の完成期にあたり、この土師器甕が突然にロクロ化する必然性はなく、また、須恵器がそれまで伝統のない煮沸具を、自然発的に生産開始することも考えられない。つまりロクロ甕は、群馬県の土器生産の伝統の上で出現するのではなく、他地域の影響下に成立したのは明らかである。この段階の隣県の情勢は、少なくとも山梨県・長野県・新潟県などでは、すでに8世紀段階に小型のロクロ甕と長胴の系譜を引く比較的良く似た形態のロクロ甕が成立し、9世紀段階では主体的地域も現れている。⁽²⁰⁾

ロクロ甕導入初期段階で他地域の影響を受けた例としては、Aタイプの共伴している藪田遺跡6区1号住居が最も顕著な例である。図7に示した6区1号住居の煮沸具の中で、5～9の長胴甕はロクロ整形でしかも胴部外面に平行叩を施す特徴的なもので、底部は丸底と考えられている。ロクロ整形の長胴甕は、中部・北陸・東北から一部東関東に分布しているが、5～9の資料には多くの点で北陸系に近い様相が認められる。そこで類似する比較資料として新潟県の小出越遺跡⁽²¹⁾と長野県の牟礼バイパスB-11号住居⁽²²⁾の煮沸具を提示した。この3例を比較すると、藪田遺跡の5～9と小出越遺跡の12の間に、プロポーションや叩きによる胴部器面整形などの共通点がみられることがわかる。また、小型のロクロ甕の比較でも、藪田遺跡と小出越遺跡との共通点が見いだせる。

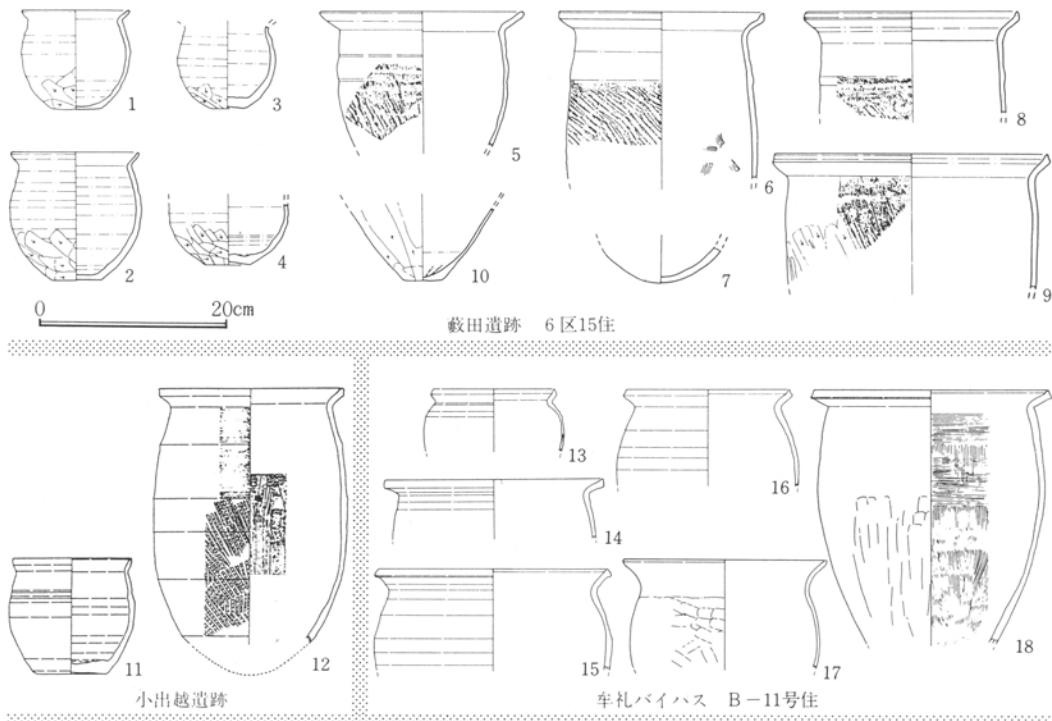


図7 ロクロ甕比較資料（1）

B～Dタイプは、Aタイプからの漸移的変化を捉えることはできず、Aタイプをベースとして独自に成立したとは考えられない。また、B～Dタイプの定着する10世紀代の新潟県などとの関係を示す大型のロクロ甕⁽²³⁾が、鳥羽遺跡I区2号住居や村主遺跡17号住居などで出土しているが、本貫地でこれらにセットされる小型のロクロ甕と、B～Dタイプとは口縁部形態の違いが大きく、Aタイプ同様の系譜としては捉えられない。そこで図8には比較資料として、山梨県の宮間田遺跡70・71号住居の煮沸具を提示した。図8の1はDタイプ、3はBタイプに極めて類似する小型のロクロ甕で、それぞれ10世紀第4四半期と10世紀第1～3四半期とされている。この時期は群馬県におけるB・Dタイプのあり方とほぼ符号するものである。図8の1・3がどの程度の分布域をもつのか捉えていないが、形態と時期の類似性は偶然とは考えられず、現状ではこうした地域との関係で成立すると考えている。

以上のように、Aタイプは新潟県などの北陸地域との関係で、B～Dタイプは山梨県などの中部地域との関係で成立した可能性が強く、時期と系譜を異にする少なくとも2段階の導入があったものと思われる。そこでとりあえずAタイプの出現をロクロ甕の第1次導入期、B・Cタイプの出現を第2次導入期として捉えておく。また、A～Dタイプは、口縁部形態の特徴からいざれも小型のロクロ甕に系譜が求められる。

7 製作者について

第1次導入期のロクロ甕製作者は、図9に示した藪田遺跡6区1号住居のロクロ甕と須恵器坏に共通する底部切り離し技法からわかるように、須恵器工人によって製作されたものである。ただこの須恵器工人は、9世紀以前から北部地域で須恵器生産に従事した集団とは異質であり、藪田遺跡報告でも「別系工人の参入」と位置付けている。また、この別系須恵器工人は、還元焰焼成された坏などの存在から、須恵器製作を目的として導入されていることは明らかである。そして6区1号住居出土のロクロ甕は、地域に供給したような出土状態が認められず、須恵器工人が自己消費的に製作したものと考えられる。したがってロクロ甕導入の初期段階では、ロクロ甕主体地域を母地としてもつ工人の直接的参入によって群馬県にもたらされたものと思われる。

第2次導入期のロクロ甕製作者は、製作技術から基本的には須恵器工人であり、しかも属性分析と図10に示した例からも明らかなように、羽釜を導入生産した工人集団と同一の製作者であったはずである。しかし9世紀末以降にロクロ甕と胎土・焼成が共通し、作りの比較的丁寧な坏・塊が出現していることは、煮沸具と供膳具を同時生産したことを意味しており、単に伝統的須恵

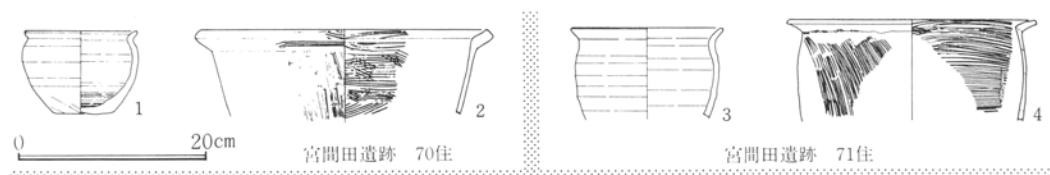


図8 ロクロ甕比較資料（2）

器生産の中でロクロ甕が生産されたものでなく、10世紀代になお還元焰焼成を意図した粗雑な作りの壺・塊類を生産した、9世紀以来の伝統的須恵器工人とは、別系統への変質を遂げた工人であったはずである。

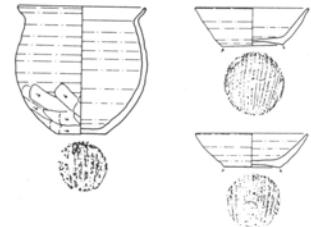
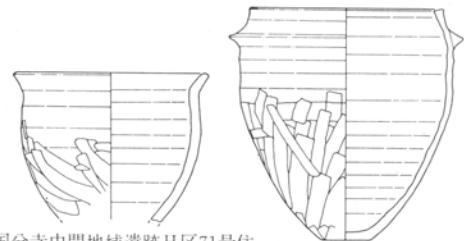


図9 藪田遺跡6区1号住
ロクロ甕・壺比較

8 ロクロ甕導入の意義について

ロクロ甕の第1次導入は、北陸系譜の須恵器工人が北部地域へ直接参入したことによる地域現象として捉えられるものである。北部地域の須恵器生産は、律令体制の中で計画的な工人配置によって開始されたとされており、9世紀段階の新たな工人の配置にも政治的背景があったはずである。この新たな工人を参入させた目的は、本来的に北部地域での須恵器生産と供給であり、ロクロ甕の生産と供給を意図したものではない。これはロクロ甕の出現する段階以降も、北部地域には「武藏型」土師器甕が主体的に供給されていることから明らかである。この段階のロクロ甕は、新たに参入した須恵器工人が自給するために製作したものであり、原則として地域に定着する性格のものではなく、煮沸具の組成を変え得るような影響力はなかったものと思われる。また、この段階に南部の地域に影響が認められないのは、第1次導入期のロクロ甕が地域供給を目的としていない点と、あわせて北部地域と南部地域とがそれぞれ独自の須恵器供給圏をもっていたことによると考えられる。

ロクロ甕の第2次導入は、土師器系煮沸具から須恵器系煮沸具への移行、つまり「武藏型」土師器甕からロクロ甕・羽釜・土釜などへの移行を意図した動きとして捉えられる。「武藏型」土師器甕が強い規制を受け組織化された体制の元で生産されていた可能性については冒頭で触れた通りであるが、「コ」字状口縁の完成直後の9世紀後半には既に形態的な退行に向かっている。この形態的退行現象は、ロクロ甕導入などの外的要因によったものではなく、内的要因による組織の解体または変質を直接示すと考えられるものである。この煮沸具の主体的製作者の解体または変質によって煮沸具生産の担い手は、必然的に須恵器系工人への移行が計画されたはずである。その第1段階として、9世紀後半で、西との交流経路である中部地域などからロクロ甕の導入が図られたものと思われる。しかし須恵器系煮沸具は、他地域のようにロクロ甕だけで構成されることなく、羽釜の成立によって一応の完成をみている。羽釜は、南北の2地域で別形態で発達するが、遅くとも10世紀初頭段階にそれぞれ完成された姿で出現することが特徴である。しかし周辺に羽釜の先行する地域は現状ではみられず、ロクロ甕のように直接導入することはできない。このような状況から、羽釜は体制によって意図的に既存器種が導入・移植された結果成立したと考えられる。特に南部の地域で生産された羽釜は、図10の比較からもわかるように、ロクロ甕の



国分寺中間地域遺跡H区71号住 同遺跡H区68号住
図10 ロクロ甕・羽釜比較

形態と製作技法をベースとして成立しているのは明らかであり、ロクロ甕を成立母体として畿内系土師器釜などの鍔を付す器種が導入された可能性が強い。さらに、図11に提示したように、後出の土釜の中にロクロ甕分類B～Dタイプに形態的に類似するものが存在している。この土釜はロクロ甕と羽釜のセット完成後に出現する新たな器種であり、形態的類似性はロクロ甕が土釜の⁽²⁾生成に関与していたことを意味している。

以上のように、ロクロ甕の第1次導入は須恵器工人の直接参入による結果であり、ロクロ甕導入そのものが意図されたものではなかった。これに対して第2次導入は、土器生産体制の変化に対応した動きとして、ロクロ甕の導入が意図されたものであり、次の段階として主体的煮沸具の羽釜や土釜を成立させている。つまり古代後半の煮沸具の大半がロクロ甕系譜で構成されたことを意味しており、この点にロクロ甕導入の意義が集約される。また、これらの須恵器系煮沸具の生産を担った工人は、本来的には還元焰焼成の須恵器生産に携わった工人と考えられ、ロクロ甕の本格的導入を契機とした須恵器系煮沸具生産の開始と共に、供膳具やその他の器種までも酸化焰焼成する工人へと変質を遂げたものと考えられる。

そしてこの変質過程で「土師質土器」などの土器群を成立させたものと考えられる。

9 おわりに

以上のように、ロクロ甕の導入を端緒とする酸化焰焼成の動きは、それ自体が古代後半の土器生産の本流を形成するものであり、土器生産体制の編成過程の一端を明らかにすることことができたと考えている。しかし、筆者が以前に検討を加えた「黒色土器」などのロクロ整形酸化焰焼成土器相互の関係や、県内各地域毎の様相について十分な把握ができたとは考えておらず、今後系統だった検討を続けて行きたい。

拙稿を執筆するにあたり、原 明芳・小平和夫・坂井秀弥・堤 隆・三浦京子・木津博明・黒澤はるみ各氏の他、多くの同僚諸氏から御教示・御指導を頂いた。また、図版作成にあたっては関口貴子氏の手を煩わせた。記して感謝の意を表したい。尚、本稿は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団昭和63年度研究助成金を取得して行った研究活動の報告である。

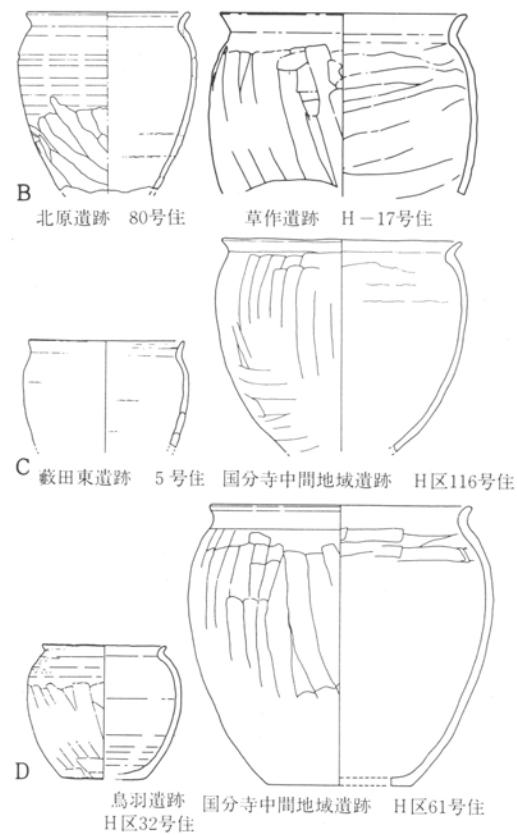


図11 ロクロ甕・土釜比較

註

- (1) 「武藏型」土師器甕は、胴部上半は斜方向、下半に縦方向の箇削りを施すこと、及び胴部下位に明瞭な接合痕を残すことを特徴とし、7世紀前半から10世紀後半まで系譜を追うことができる。口縁部形態は「く」字状から「コ」字状へと変化し、胴部は短胴化するが、「コ」字状口縁の完成後は、器高はほぼ一定で口縁部の器肉が厚くなる方向に退行する。また、胎土・焼成は「北武藏型」土師器甕と共通要素があり、同じ生産体制の中で生産されていたものと考えられる。
- (2) 「土釜」は本来畿内地域などで「羽釜」「鍔釜」などの土師器釜と同義語として使用されていたと考えられるものであるが、群馬県では11世紀代に主体的にみられる口縁部が短く外反し、胴部の張る酸化焰焼成の甕型土器について当てられている。
- (3) 中沢 哲氏によって『清里・陣場遺跡』報告中で提唱された土器群で、甕と壺・A・B・Cの完成された4タイプで構成され、須恵器工人の変質によって成立するとされている。粉っぽい胎土と比較的丁寧な作りに特徴がある。
- (4) 「ロクロ土師器」は、各地域で概念に差がある。南関東におけるロクロ土師器の概念と出現背景については、佐久間豊氏の「房総をめぐる奈良平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」『研究紀要』(財)千葉県文化財センター 1987に詳しい。
- (5) 以前筆者は、「足高高台を有する土器について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987、「群馬県における内面黒色処理を施す土器の一侧面』『古代集落の諸問題』玉口時雄先生古希記念考古学論文集 1988でロクロ整形酸化焰焼成を特徴とする土器について検討し、その製作者について「ロクロ土師器」と規定した。しかし他地域でそれぞれの背景を考慮して設定された概念を無批判的に導入したことには問題が残った。そこで本稿では、この「ロクロ土師器」という概念を保留し、その実体把握に努めることにした。
- (6) 保坂康夫「山梨県下における古代前半のロクロ整形土師器甕をめぐって」『山梨縣考古學會誌』第2号 山梨県考古学協会 1988
- (7) 坂井秀弥「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川県考古学会 北陸古代土器研究会 1988
- (8) 三浦京子・黒澤はるみ「平安時代の煮沸具について」『研究紀要6』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (9) 蔡田遺跡6区1号住居出土遺物のようなロクロ整形で胴部に叩きを施すものや、鳥羽遺跡I区2号住居出土の口縁部が厚手でわざかに受け口状を呈する「北信系」とみられるロクロ甕は、出土量がわざかでここでは分類に含めていない。
- (10) 『蔡田遺跡』群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本鉄道建設公団 1985
- (11) 『蔡田東遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (12) 『上植木光仙房遺跡』建設省 群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (13) 『三ッ木遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (14) 『鳥羽遺跡』群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 1988
- (15) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)(3)』群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 1988
- (16) 『中尾(遺物編)』群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- (17) 大江正行氏が「S K 332について」『鳥羽遺跡No 8』群馬県教育委員会 1979で報告したもので、皿状の壺が天仁元年(1108年)降下とされる浅間B軽石によって埋没した土坑中から出土していることから、これらの壺が12世紀初頭まで下るものと認識されている。
- (18) 坂井秀弥「古代のごはんは蒸した『飯』であった」『新潟県考古学談話会会報第2号』新潟県考古学談話会 1988で土器に付着している炭化物(おこげ)の観察から大型甕と小型甕とでは使用方法が違う点について指摘している。
- (19) 註18でも述べたように、古代の調理法は基本的には「煮る」と「蒸す」2種類であったと考えられるが、羽釜には煮た痕跡がみられない。
- (20) 大型のロクロ甕は、外反する口縁部と長胴の器形のものが多く、太平洋側に平底、日本海側に丸底が多く分布している。
- (21) 註7
- (22) 『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB・C・D地点』 長野市教育委員会 長野市遺跡調査会 1986
- (23) いわゆる「北信型」または「北信系」と呼称されているロクロ甕。
- (24) 『宮間田遺跡』 武川村教育委員会 島北土地改良事務所 1988
- (25) 群馬県におけるロクロ甕は大小にかかわらず、Aタイプを除いて口縁部が外反するものが主体的で、中部や北陸地域における大型のロクロ甕の口縁部形態とは違っている。
- (26) 月夜野地域で生産された羽釜は、胴部の張りが弱く口縁部の直立する器形で、胴部全面を鍔部に向かって縦位の箇削りすることを特徴としている。これに対して南部の地域(吉井地域?)で生産されたものは、胴部の張りが強く口縁部は内傾する器形で、箇削りは胴部下間に施される場合が多く、上半はロクロ整形痕を明瞭に残している。
- (27) この点については、註8の文献で三浦・黒澤両氏によって成形技術を含めた類似性及びその関係について既に指摘がなされている。